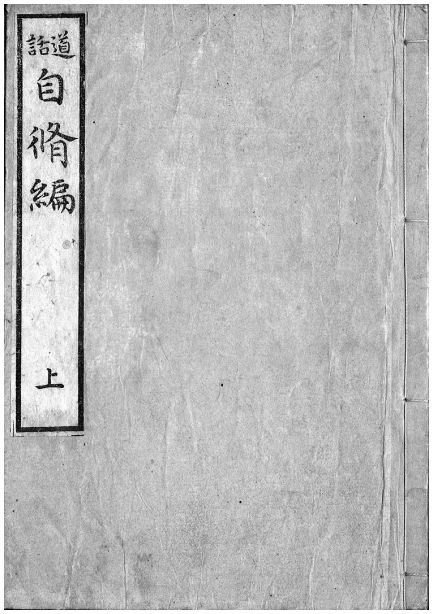
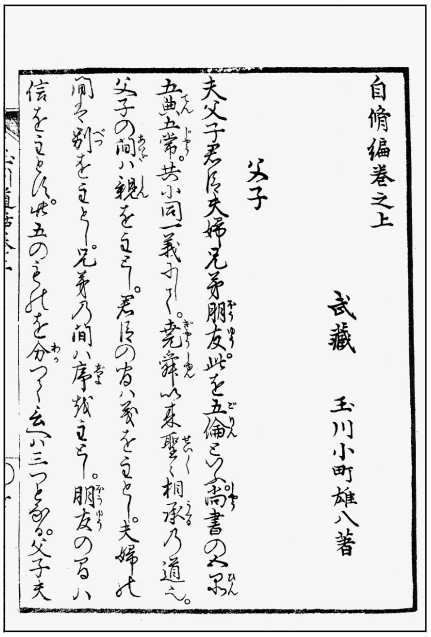
【読楽】023 「自修編」を読む ＊読楽箇所＝上巻「父子」編の一部



［小町玉川の教育論］ ＊『月刊武道』の拙稿「小町玉川の子育て七カ条」を一部改編・抄録

漢学者・小町玉川（雄八、1775-1838）は、武蔵国多摩郡和泉村（現・狛江市）の百姓の家に生まれ、後、江戸へ出て儒学を学び、関東各地を遊歴し漢学や詩文を教えた。だが、文政7年（1824）、50歳の時に中風を病み、物忘れもひどくなり、食事にも介助が必要で、言語障害の症状も見られたため、人前での講話も避けるようになった。

しかし、妻の看護や療養が功を奏したのか、文政10年（53歳）には井伊家お抱えの儒者となり、文政12年（55歳）には関東各地における講話をまとめた『自修編』を出版、さらに、還暦時の感慨を「今や全快とは云うには非ざれども頗る本復す。豈天幸（天の恵み）に非ずや」と天保6年（1835）刊『てみやげ』で述べ、房州館山に出向いて門弟に『論語』を講じた様子も伝える。天保9年（1838）8月に64歳の生涯を閉じたが、晩年数年間に精力的に活動し、教育論を含む2冊の著作（『自修編』『てみやげ』）を残した。


自修編巻之上
武蔵 玉川小町雄八著
父子

●『自修編』が説く幼児教育の重要性

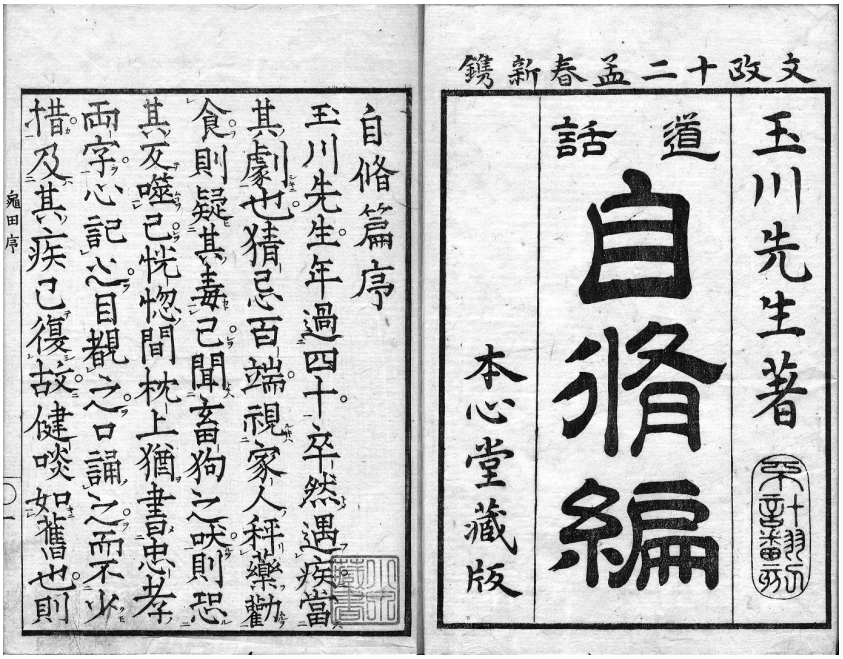
玉川は、『自修編』でまず父親が慈悲の心で子を育てるのが「父の道」であるとし、育児の要たる「童蒙幼稚の時」に努めて心を尽くすべきこと、特に、この時期に父母が正道を以て教育すれば、子供にも自然と善を欲する心が生じること、父親が父の道を尽くせば不孝者はあり得ないことなどを説いた。

ただ、幼児教育で全てが決まるわけではなく、心掛け次第では青年期の教育で挽回できる可能性を認めつつも、彼は「子の善悪・吉凶・禍福の一生涯は幼時の養育が決定的な影響を持つのであって、幼時をおろそかにしてはならない。この時期を逃せば、親の教えも扞格（拒否）して聞き入れ難くなる」とし、さらに、「昨日の不善人が今日は善人となる得るように、日々の変化を知るべき」とし、それ故、「童蒙の時に教える父親の要務を忽せにしてはならない。姑息（その場しのぎ）を捨て、必ず正道を以て子供を教育せよ」と教え、子供の成長を樹木に譬え、こう戒めた。

> 成長し始めの樹木は、性質が柔軟で、枝を曲げて円座にし、幹をたわめて物の形を作るなど思い通りの加工を自由に施せるが、ある程度成長すると、このような加工は困難で、枝や幹の向きを直したり、姿を変えようと思っても自由にならない。人の成長も同じで、幼時は従わせることが自由で教育を施しやすいが、段々と物心が付けば、自分の捏造（でっちあげ）を用い、偽りを交え、年長者の善言・格言を用いず、自分が為すことを善と思うようになる。……樹木も人間も、最初の教育が大切である。

この考えは江戸時代の育児書に共通する「先入主（先入観）」の教育観であり、必然的に、早い段階で正しいもの、善なるものを子供に教え、あるいは大人が模範を示して善導することが求められた。玉川は、特に、温柔と正直を説き、子供の喧嘩で我が子を贔屓する親の愚行を戒めた。

> 子供は、なるべく温柔に扱うべきである。子供の多言敏材（言葉数が多く、頭の回転が素早いこと）を禁じよ。年を重ねるに従って次第に厳正にし、決して不善を教えてはならない。幼時は人の言葉を決して忘れないもので、見聞きしたことが全て心の本体となる（これを「童習、心為る」と表現）。それ故、子供を欺いてはならない。例えば、ここに食べ物があり、子供に「誰にあげるの」と尋ねられ、「お前にやるよ」と答えたのなら、必ずこれを与えよ。些細なことにも注意して養育せよ。
>
> また、我が子が他の子供と争って泣けば、多くの親は我が子を贔屓する。これは小人の心で、かえって我が子を損なう。我が子を思うなら、物事の是非善悪を正す必要はなく、我が子を叱り戒めて連れ帰るがよい。罪を己に引き受けるほど、徳を大いに養うものはない。しかしながら、他人の子供の非を数え、その親に訴え、怒り責めるのは、道理に暗い者のすることである。そうすれば、やがて、我が子が我意を増長させ不善に進むのは、鏡に映し見るほど明らかなのに、何故そのことに気付かないのか。



[概要]

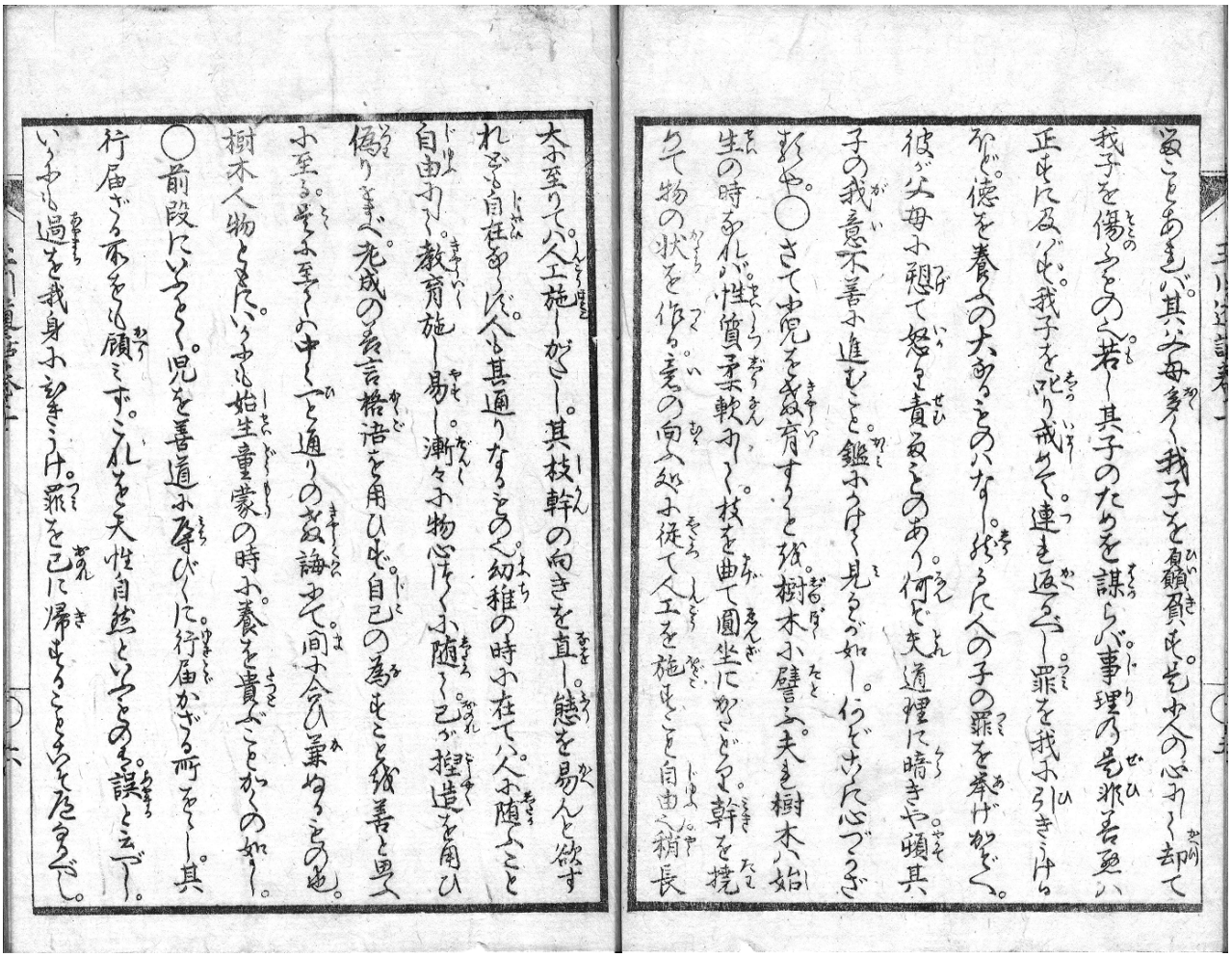
〈道話〉自修編［自脩篇・玉川道話］

【判型】半紙本3巻3冊。

【作者】小町雄八（玉川）作。石川雅望（六樹園）序。

【年代等】文政11年（1828）8月、長谷川五平序。同年10月、亀田綾瀬（りょうらい）序。同年7月、酒井履信跋。文政12年1月刊。［江戸］本心堂蔵板、河内屋太郎兵衛（奎文閣）売出。

【概要】上総・下総など関東各地で平易な教えを説いた小町玉川晩年の道話をまとめたもの。全3巻14編からなり、上巻に「父子」「君臣」の2編、中巻に「夫婦」「兄弟」「朋友」「士」「農」「工」「商」の7編、下巻に「学習」「経済」「釈教」「旅困」「養生」の5編を収録。このうち、上巻「父子」編と下巻「学習」編で子育て論を展開する。「父子」編では、まず「五倫」や「父子」の要点を述べた後、慈悲心で子供を育てることが父の道であり、幼時の教育如何で子供の善悪・吉凶・禍福一生涯が決まるのでこの時期を粗略にしてはならないと戒める。続けて、子供が不善人になるのは父母が教育法を知らないからであるとし、子育ての要点として「子供に嘘をつかない」「幼時のうちに教育せよ」「子育ては何事も老人に相談し人事を尽くせ」「師を選び、師に贈る金銭等については子供に語るな」等々を説く。また「学習」章では、学習・学問・礼の字義や素読法について述べる。

【翻刻】経済叢書19、経済大典29、子育ての書2（抄）。【影印】育児集成8。

[本文]　＊読楽箇所＝上巻「父子」編の一部（上巻本文5丁裏「○さて小児を教育することを…」以降）